

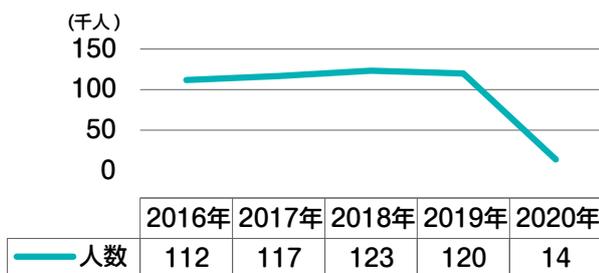
コロナ禍の大連市内の現況（2022年1月末現在）

富山県大連事務所 副所長 川田 拓磨

1. はじめに

新型コロナウイルスが最初に確認されてから、はや2年が過ぎた。富山ー大連便を含む航空便も運休が続き、大連へのフライトは1月現在、成田空港および関西国際空港の2空港からのみとなっている。富山きとときと空港からの出入国者数は近年、年間12万人前後で推移していたが、2020年2月の国際線運休以降はゼロである。（資料1）

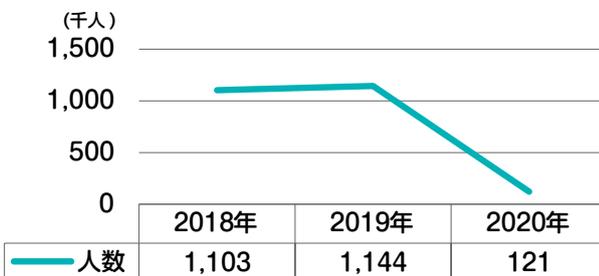
【資料1】 富山空港の出入国者推移



引用：出入国管理局 出入国管理統計統計
(https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_nyukan.html)

一方の大連市も、近年の外国人宿泊客数は110万人を超えていたが、2020年には12.1万人に急減している。（資料2）

【資料2】 大連市外国人宿泊客数



引用：大連市国民经济和社会发展统计公报

この状況下で筆者は富山県大連事務所の副所長として、2021年10月に成田空港経由で大連へ入国した。既にコロナ禍であり、「ゼロコロナ対策」

が日常と化した中国・大連の現状について以下に記す。

なお、以下の記載はいずれも2022年1月現在のものである。日々対応が目まぐるしく変わるため、各種情報と差異がある点にご了承願いたい。

2. 大連市の、新規入国者隔離対応

先述の通り、筆者は2021年10月29日に大連へ到着し、ホテルで28日間集中隔離された。既に他のレポート類は書籍、インターネット等で多数存在するが、筆者入国時の最新情報について以下に記す。出入国時については写真撮影の制限等も有ったため、今回は隔離中のホテル環境について記載したい。

日本人が収容されるホテルは主に、「郊外のリゾートホテル」及び「市内中心部のビジネスホテル」の2か所である。収容されるホテルは自動的に割り振られ、筆者と同じ便で到着した日本人は全員、後者の市内ビジネスホテルに収容された。



隔離ホテルの部屋（筆者撮影）

ホテルでは毎日2回の体温測定が求められ、加えて28日の期間中に計6回のPCR検査および1回の抗体検査が行われた。

集中隔離中は当然ながら室内から出るとは認められず、シーツの交換や衣類の洗濯等も自身で行う必要があった。

食事に関しては、多くの日本人駐在員が過去に大連を訪れていたこともあり、比較的日本人の口に合うものが多いように思う。例えば鰻丼や納豆、うどん等の和食が提供されることもあった。しかしながら基本的には脂っこく香辛料が豊富に使われる中華料理の割合が多く、どうしても食べられない料理もあった。ホテル支配人に依頼して外部からの出前を取ることも出来たが、ごく限られた種類のファストフードのみの対応であった。

筆者は隔離期間中、中国語のオンライン授業を受講していたため、孤独な日々も比較的気楽に乗り越えられた。しかしながら、外界と接する機会が無い状況での28日間の隔離は、人によっては非常に辛く、途方もなく長い日々であろうと思う。

3. 大連市内の「ゼロコロナ」への動き

現在中国では、新型コロナウイルス感染を完全に排除する、「ゼロコロナ」対応を行っている。コロナとの共存、「ウィズコロナ」を進める日本とは大きく異なる部分だと言える。

例えば、公共施設や交通機関の利用時には本人の「健康コード」の提示が必須となっている。「健康コード」は各自のスマートフォンにアプリを登録し、個人の行動履歴を管理するシステムである。スマートフォンのGPS機能で位置情報を収集し、過去14日間に滞在した都市名が全て表示される。コロナ感染者が発生した「中・高リスク地区」に指定された場所に滞在した場合、「健康コード」が赤色や黄色になる。赤色が表示された場合、14日間の集中隔離が必要となる。1集中隔離期間終了後は健康コードが黄色に変わり、自宅隔離および健康観察期間へと移行される。

集中隔離対象となった場合には即日、市の政府より連絡が有り、市指定の隔離用ホテルへ強制収容されるとのことだ。過去に隔離された方の話に

よると、突然電話で2時間後に迎えに行く旨が告げられ、救急車でホテルまで連れていかれたとのことである。コロナに感染したかどうかではなく、濃厚接触者や、その地区の住民であるというだけで集中隔離の対象となる。日本では考えられない厳しい措置だと感じる。



国务院の健康コードアプリ（筆者撮影）

筆者は大連市に加えて14日以内に北京へ出張したため、北京を訪問した履歴がアプリに残っている。北京市には中リスク地域が存在するため、その地域を訪問していないか確認するように画面に表示されている。もし訪問していた場合には矢印マークが赤色や黄色で表示され、集中隔離の対象となる。

健康コードが緑でない限り、公共施設等への立入は制限されてしまう。つまり、買い物も通勤も出来なくなる。また、アプリ画面の提示が必須であるため、筆者は常にスマートフォンの電源が切れないよう留意しながら生活を送っている。誇張ではなく、本当に「命の次に大切」な物だ。

なお健康コードには、中国国务院が作成した国内共通のアプリに加え、各省ごとのアプリも有る。筆者も普段は、遼寧省の健康コードアプリを利用している。北京へ出張した際には、事前に北京市の健康コードアプリをインストールし、実名、パスポート番号等の登録を行った。PCR検査結果に

ついてもパスポート番号で紐づけされており、初めてアプリを起動した時には既に、大連で受けたPCR検査結果が表示される。

さて、スマートフォンを持っていない子どもやお年寄りの場合、健康コードの提示はどうするのだろうか。事務所の中国人スタッフに聞いたところ、家族のスマートフォンで健康コードを代理登録するそうだ。この場合、お年寄りが1人で買い物に行っても健康コードを提示出来ないため入店出来ないことになる。このような不便さはあるが、中国の国民はこれを受け入れて生きている。

先日、筆者が入居しているホテルから突然連絡があり「今すぐ入居者全員のPCR検査をすることになったから、早く来てください」と呼び出された。入居者に感染者が出たのか等の具体的な説明は一切無く、意味が分からないままPCR検査を受けた。このような状況でも全く慌てず、全員が静かに整列して自分の順番が来るのを待ち、子どもたちも慣れた様子で口を開けて検査を受けていた。既にPCR検査は市民にとって日常茶飯事であり、粛々と対応していたのが印象的であった。

個々人の自覚に任せている日本とは大きく異なり、中国でのコロナ対策は完全にアプリやPCR検査で市民を管理している。その管理に文句を言わず、自然に受け入れられる中国だからこそ「ゼロコロナ」対策に成功しているのだと言える。

4. 市内観光地の現状

着任してからまだ日が浅く、またコロナの影響で移動にも制限があるため、ごく限られた情報であることをご了承願いたい。

大連市内には横山寺や星海広場等の様々な観光地がある。コロナ禍前には日本をはじめ様々な都市からの観光客が訪れていた。しかしながら、それらの観光地を訪れる客は現在は非常に少ない。

大連市は過去に何度も感染拡大した経緯から、特に新型コロナ対応が厳格であり、観光客が訪れにくい環境に有ることが一番の要因であると思わ



元日の横山寺初詣。参拝客はまばら（筆者撮影）

れる。都市によるが、例えば48時間以内のPCR陰性結果提出が必要であったり、急遽施設が閉鎖されたり、強制隔離されたりするケースも有るため、観光を楽しむ余裕は少ない。

大連市では、北京パラリンピック終了後の3月15日までは大型イベントの開催が厳しく制限されている。加えて不要不急の省外への移動も極力控えるように通達が出状されている。そのため、平年は多くの帰省客・観光客が見込まれる春節休暇も、今年は静かなものになりそうだ。

5. 終わりに

富山駅や各地の観光地から、中国人をはじめとした外国人の姿が消えて久しい。富山県民である筆者としては、一刻も早くコロナが終息し、往来が再開することを祈るばかりである。「いつでも大連（あるいは富山）に行ける」と気軽に思っていたが、今となってはほぼ不可能である。

いつかまた、コロナ禍前のように自由に往来できる時代が再び訪れるように願う。富山県、大連の両都市のコロナ終息後の人的交流再開に向け、当事務所も微力ながら関わっていきたい。

2022年1月31日現在